特集

家庭に望むこと
幼稚園に望むこと

——(1)——

家庭に望む

——幼稚園から——

佐竹千歳

麦がのび雲雀が歌つて再び春がめぐつて来た。春の訪れはいずれの家庭にもうれしい事ではあるが、とりわけ新入園の愛児を持つ家庭では一家挙つてどんなにか其の日を待つて居る事と思う。

私は幼稚園に在つて年毎に多くの幼な子を迎えている。例年の事乍ら之等の幼児を迎えて先ず私は、彼等の神々しい迄に真剣な姿と全身に漲つている生きる力とに胸を打たれる。私はこの幼い魂一つ一つに無限の愛情と尊敬を覚えると同時に、新しく負わされた重大な保育の責任を思わずには居られない。

近来保育に対する理解が深まり幼稚園についてもその是非云々の時代が過ぎ去つた事は同慶の至りである。が然し、学令前の教育が常識となつた事により、今日では入園そのものが狭き門の感を一般に与えている。この点からも、わが子の新入園は両親を喜ばせたしかにほつと一安心させるにちがいない。

然しここに問題となるのは、幼稚園というものに対して適当でない解釈が世間には案外に多い事である。「幼稚園にやつておけばおやつをせがまれなくていい」「子供が幼稚園に行つてる間はのうのう出来る、保育時間はなるべく長くしてほしい」「うちの子は幼稚園に行つてるから放つておいても安心だ」等々。

なるほど幼稚園では幼児をあずかり適当な環境を与えて、幼児期に必要な生活の凡てに亙つて指導する。身体の面はもとより、知性の発達、情緒の発達、更に社会性の発達につい

て細かい心づかいをしては居るが、之を時間的に見て彼等の一日の生活の一部にすぎない事は明かである。故に「幼稚園にあずけて置けば安心だ」という所謂あなたまかせの考は根本的に改めてほしいと私は思う。幼児期の教育は幼稚園だけでなされるものではない。私は保育の任にある者の立場から幼稚園を理解して頂く意味あいも合せて、幼な子は斯く扱わるべきもの、幼児の教育は斯くありたきものと願う点を経験を通して世の多くの父母、特にお母様に訴えたい。

では、幼稚園とは如何なるものであろうか。

一、幼稚園とは小学校の準備教育をする所ではない。

私は先ず第一に此点を強調したい。世の識者、又教養ある社会人、時には教育者自身の中にも此点を誤解している向が相当にある事は、我々にとつて誠に驚異に値する。世の多くは成人してよい職業につく為にのみ大学に憧れる。この様な人は大学に学ぶ為に高校や中学があり、中学に学ぶ為に小学校が存在するとでも解釈して居るのであろうか。

我々は教育の段階を幾つかに分けて考えているが、仮りにそのいずれもが本来の目的を持たず次の段階の為の従属的な存在であると解釈するならば、それは教育に対する甚しい冒瀆であると言つても過言ではない。人間は教育の各段階に於てもつと人格的な扱いを受けてよいものである。否人格的に扱われねばならぬものである。私は教育に於ては知的方面と並行し、或はより以上に人格完成への教育が、特に幼児期になされねばならぬ事を常に念頭に置いている。この故に、もし「〇〇有名校に入学させる為に準備教育をみつちりやつてほしい」とでも言う人があつたら、私はきつぱりと入園をお断りする「私の園ではそれには応じかねます」と。

二、幼稚園は幼児に対し社会生活への橋渡しをする所である。

幼児が父母の手を離れ幼稚園生活に入るという事は、彼等の生活にとつて最も著しい変化で特筆すべき新経験である。私は彼等にこの経験を通して人生の黎明を感じさせ、希望と抱負と自信とを抱かせ、隣人を愛する愛と真実の生活に導きたいと希つている。

入園の時期は花の四月、小鳥がさえずり風も薫る春たけなわの候である。暖かい母の懐を感じさせる雰囲気に、優しい先生に寄り添うて不安なく過す半日は誠に美しい夢にも似た社会生活への橋わたし第一歩である。二日、三日、四日、彼等の五感は急速に活動を進展し全身をもつて彼等自身の生活を生活して行く。彼等はある時はグループを作り、又時にひとりを楽しみつつ、自由に考え、工夫し、遊び又学ぶ。その間には子供らしい幾多の発見がなされ又失敗も繰返されるであろう。斯くして幼児達は次第に社会性に目覚め、他を理解し己を持する道をわきまえて行く。幼児と共に在る場合我々

は常によき助力者、よき指導者でありたいと努める。一人々々の個性をよく理解し尊重して落度なく彼等の行動を見守りつつ、幼児と共に学びその生活を共にするものでありたいと願つている。

幼児は環境から非常な影響を受けるものである。彼等は環境によつてよい経験をしたり、時として反対に悪い経験をしたりする。子供の時にあけくれ眺めた母の笑顔、やさしい言葉使いは、いつかその心に焼きついて殆んど意識なしに子供の人柄になつてしまう例がよくある。斯く考えてくると、家庭がそうであるように幼稚園の責任も重且つ大である。我々は常によい環境に幼児を育てる工夫をせねばならぬ。

私は幼児に最もよい環境は自然であると思う。青い空、緑の林、そして清い空気、花、鳥、水、凡ては彼等の心を楽しませるのみならず、春夏秋冬さまざまの姿をとつて自然の営みを語り宇宙の神秘を学ばせてくれる。私はさんぽと称して入園当初から園児を度々自然の中へ案内する。彼等は嬉々としてれんげを摘み、蝶に戯れ、雑草を採集し、雨蛙を追つてかけずりまわる。時にはキャベツ畑に絞白蝶の生態をしらべたり、もち草をつみ帰つて草だんごを作り時ならぬ御馳走に園児を狂喜させたりもする。まことに楽しい園外保育、私はこれ程豊富に素朴な而も貴重な教材を提供して呉れる所を他に知らない。

三、幼稚園に於て園児はすべて平等に扱われる。

日本は敗戦によつて世界に類例のない平和憲法が制定され民主国家としての誕生を見た。戦後九年、日を追うて形勢は逆転の方向にあるように見える。然し何はともあれ、我々幼児教育者が平和の線に沿つてどの子も平等に良心的に扱つている事は事実だ。ある母親は、わが子こそ、我が子ばかりはと願つている事を知つているが私はとり上げない。反対に貧乏と労仂とにさいなまれ自らを卑下しているお母さんに私は告げたい。「御安心下さい。あなたのお子さんはしつかりと見守られていますよ」と。

次の時代は子供が作る。よい社会、よい国家、よい世界を実現して貰うために、我々は命がけで真剣に幼な子を守り育くまねばならぬことを痛感している。

紙面の都合で私は書きたい事を割愛するが終りに二つ三つお母様方へ是非共お願いしたいことを記して筆を擱きたい。

無暗に子供の生活に干渉しないこと、これがその第一である。大人はおせつかいやき、又身勝手なものである。子供は自分の所有物のように心得て大人の考を押しつけたり、一寸した思いつきで叱つたり賞めたり、童心を傷けるような批評や悪口を不用意に口にする。これはお互に慎しみたいものである。

次は子供を自分の虚栄のために育てないこと、親の満足の

ために子供には迷惑千万なお稽古事などを濫わせるの類もその一例である。

家庭を浄化してお互に真心のこもつた励ましあい、助けあい、愛しあいをする地上の楽園を実現して頂きたい、これが第三である。この為には婦人……殊に母の……の自覚をまず取り上げなければならない。もつとどつしりと大地に根をおろし、なやみ苦しみ凡てをのり越えて、天に宝をつむ高い理想に母親が生きる時、子供は真に子宝としての光を放つものである。換言すれば母の犠牲の精神によつて子供の魂が成長するのである。

斯くして浄化された美しい家庭と行き届いた幼稚園、この両者が協力して補いあいつつ幼児の指導にあたる時に幼な子に対する教育は最高の水準に迄高められて行く事を信ずるものである。

（松沢幼稚園主任）

幼稚園に望む

——子供と共に——

佐藤久子

この四月に、四人目の女の子を幼稚園に送る私は、昭和十一年より足かけ五年、幼稚園の保姆をつとめました。あの頃私と遊んだ子供達はもう大学に入りそしてお嫁にいく子もいます。つい先達も嬉しいおめでたの便りに、早速お祝を送ろうと小包を作りながら、私はまだあの頃の楽しかつた自分の姿と、今の世帯疲れた自分とが、別の人間ででもあるかのような錯覚をおこしつつ、包みに紐をかけているのでした。

長男、次男、長女と三人を同じ幼稚園に入れ、私は世の常の母親と同じように、遊戯会に、遠足に、運動会にと、いそいそと子供と出かけました。でも、時々忘れものをした時のように子供の通つている幼稚園がもの足りなく思われ、覗いては悪いような気もしながら覗かずにはいられません。

「先生は、ちつとも遊んでくれないよ、よそのおかあさんとお話ばつかりしているの、あとはお掃除よ」

「ふーん」

「只今」……と子供が帰れば、つい口ぐせになつて、

「今日は何してきたの」

と、口から出てしまいます。

「なんにもしてこないさ。ただ遊んできただけ」

「どんなことしてあそんだの」

「いろんなこと、いつもとおんなじことだよ」

子供は面倒臭そうに外へかけ出します。